

## プルーストの「文学的誠実さ」について

田 中 幸 作

### La Sincérité littéraire de Proust

Kohsaku Tanaka

#### 序

文学の世界は、作者が作品を読者に提供する場であり、またこれら三要素が絡み合う一見単純なそれでいて複雑な構図の元に成立している。この構図の中にあって、作者自体や読者自身は、物理的時間の限界という呪縛の中にあるのに対して、時や時代を越えて読み継がれてゆく作品は、その作品自体が内包する文学的時間とも呼び得る様々な時間経験を与え続けるという意味に於いて、恐らく絶対的であるに違い無い。

プルースト<sup>(1)</sup>は次のように述べている。

Moi je dis que la loi cruelle de l'art est que les êtres meurent et que nous-mêmes mourions en épuisant toutes les souffrances, pour que pousse l'herbe non de l'oubli mais de la vie éternelle, l'herbe drue des œuvres fécondes, sur laquelle les générations viendront faire gaîment, sans souci de ceux qui dorment en dessous, leur <déjeuner sur l'herbe>.<sup>(2)</sup>

このくだりは、『失われた時を求めて』<sup>(3)</sup>の大団円に於ける《私》の独白であり、このくだりの直前にはユゴーの「草生い茂るべし、人の子死すべし」<sup>(4)</sup>という一節が引用されている。その絶望的な死の想念に反駁するかのように、プルーストは作品の絶対性を謳うのである。「人が死ぬのも私たち自身があらゆる苦悩をなめ尽くして死ぬのも、忘却ならぬ永遠の命を保つ草、実り多い芸術作品のように生い茂る草を育むためなのであり、そのような勁草の上には、その下に眠る人々にまったく無関心に、次々と新たな世代の人々が《草上の昼食》を楽しみにやって来る、それが芸術の残酷な掟である」<sup>(5)</sup>と。

本稿では、プルーストの精神世界に於いて大きな位置を占めている死生観を彼の作品中に改めて追うことで、プルーストというひとりの作家が、作品に対して、また読者に対して如何に誠実であったかを考察してみたいと思う。

## I

マルセル・ブルースト自身の意志によって刊行—作品として読まれること、つまり読者の存在を意識して—された小説作品は、1896年出版の『楽しみと日々』<sup>(6)</sup>と1913年11月14日、第一篇『スワン家のほうへ』の出版に始まり1919年の第二篇『花咲く乙女たちのかげに』、1921年の第三篇『ゲルマントのほう』、1922年の第四篇『ソドムとゴモラ』、そしてブルーストの死後に刊行が持ち越された1923年の第五篇『囚われの女』、1925年の第六篇『逃げざる女』、そして1927年の最終篇『見出された時』に終わる『失われた時を求めて』の二作品<sup>(7)</sup>である。これら二作品には、作者が作品を読者に提供する場、言わばある種の回路のようなものが見出されるだろう。

さて、1893年の末には出版が予定されていた『楽しみと日々』の実際の発行は、約三年後の1896年の半ばであった。ある意味で、この作品の出版の契機ともなった1893年10月のブルーストの友人ウイリー・ヒース<sup>(8)</sup>の死。1896年の出版に際しては、1894年7月の日付を持つウイリー・ヒースへの献辞が作品の巻頭を飾っている。日付を単純に追えば友人の死から約十ヶ月後のブルーストの友人に対する思いがそこには見られる訳である。

Pléiade版では四ページにわたるその献辞に次のようなくだりがある。

(・・・) Et qui même n'a connu de ces moments, cher Willie, où il voudrait être où vous êtes? On prend tant d'engagements envers la vie qu'il vient une heure où, découragé de pouvoir jamais les tenir tous, on se tourne vers les tombes, on appelle la mort, 《la mort qui vient en aide aux destinées qui ont peine à s'accomplir》. Mais si elle nous délie des engagements que nous avons pris envers la vie, elle ne peut nous délier de ceux que nous avons pris envers nous-même, et du premier surtout, qui est de vivre pour valoir et mériter.<sup>(9)</sup>

『楽しみと日々』に収められた七編の短編の内、三編が明らかに死をテーマとしており、その内二編が巻頭と巻末に据えられ、この作品に死のイメージを基調として与えている。<sup>(10)</sup> また、友人たち<sup>(11)</sup>の死や、1889年3月、1890年1月と相次いだ肉親の死<sup>(12)</sup>、さらに言えば真の芸術家にとっても一般の読者にとっても多かれ少なかれそうであるようにブルーストにも生涯にわたって付きまとい続けていたであろう死の観念。若きブルーストは友人の死という現実の中で果たして来世の存在の可能性に触れようと試みるのである。「ところで親愛なるウイリー、あなたが今在るところに在りたいと願ったこの瞬間瞬間を知らない人が誰かいるだろうか」とブルーストは亡き友へ追悼の言葉を述べている。彼は「あなたが今在るところ」を確信を持ってその精神に捕らえているのだろうか。しかし、彼はすぐに現実的な死によって失われるであろう現実と未来、死の対極にある現世に引き戻されてしまう。「しかし死は、

プルーストの「文学的誠実さ」について

私たちが人生への約束からは解放するにしても、私たち自身への数々の約束、とりわけ価値あることのために報いられるべき行為をなすために生きるという約束からは私たちが解放することは出来ない」と。当時二十三歳のプルーストのこのような死に対する観念は終生大きく変化することは無く、この献辞に述べられている人生に対する姿勢は『失われた時を求めて』に至る彼の生涯を貫いているように思われる。

## II

プルーストが《唯一の書物》の完成を確信した時、彼の膨大な数<sup>(13)</sup>の書簡がいつの日か今あるような書簡集の形で世に出て、不特定な読者の眼に触れるようになることをプルースト自身が想像し得たかどうかは分からないし、まして、手紙の特質として本来それはあまりにも私的なものであるはずである。しかしながら、手紙というものは私的であるが故に、そこで表明される事実や感情は文学作品とは別の真実味を帯びていると考えることが可能である。

プルーストの手紙の中に彼の死生観を追ってみたいと思う。最初に取り上げるのは、『失われた時を求めて』の作中人物サン・ルー<sup>(14)</sup>のモデルとなったプルーストの友人ジョルジュ・ド・ロリス伯爵宛<sup>(15)</sup>の1904年9月の日付入りのものである。その手紙に次のようなくだりがある。

( . . . ) Je ne suis pas comme vous, je ne trouve pas la vie trop difficile à remplir et quelle folie, quelle ivresse si la vie immortelle m'était assurée! Comment pouvez-vous vraiment, je ne dis pas, ne pas croire car de ce qu'une chose soit souhaitable cela ne fait pas qu'on y croie--au contraire hélas--mais en être satisfait ( . . . ) tous ceux qu'on a quittés, qu'on quittera ne serait-il pas doux de les retrouver sous un autre ciel dans les vallées vainement promises et inutilement attendues! Et se réaliser enfin!<sup>(16)</sup>

「もし永遠の命が僕に約束されたとしたら、なんという狂気、なんという陶酔だろう」とプルーストは先ず述べている。ここでの「永遠の命」とは、肉体は勿論のこと魂をも含めての現世での不滅を意味してはいないことに注意したい。彼にとって「永遠の命」とは「この世を去ったすべての人々、これから死に別れるすべての人々、そうした人々と、別の空の下で、むなしく約束されむなしく待ち望まれていた谷間のあちらこちらで、再会する」ことなのである。さらに彼は、このような来世での「再会」は「ついには現実となる」ことを強い願望として宣言する。ここで確認出来るのは、ひとりの人間の人生に対するひとつの姿勢である。来世の有無が問われているのでは無く、実現可能であるならばプルーストは、彼の人

生に於いて出会ったすべての人々との再会の方法を、来世の存在を信じようとする事で、あるいは永遠の書物の存在を信じようとする事で、その再会の方法の可能性のあることを、ひとりの作家としての本能的な資質によって感じていたに違いないと考えられる。

さて、プルーストの母は、1905年9月にこの世を去るのであるが、彼は母親の死に際して幾通かの手紙を残している。プルーストが最も敬愛していた彼女の死の直前に、彼は、『失われた時を求めて』ではゲルマント公爵夫人<sup>(17)</sup>として登場するエミール・ストロース夫人宛<sup>(18)</sup>の手紙で次のように述べている。「私は母に私を失なう悲しみを味わわせないために、母のあとでなければ死にたくないとつねづね願っていました。しかしやがて私たちとお別れなのだ、一人ではほとんど生きてゆけない私を残してゆくことになる、おそらく不十分に、ひ弱に生きてゆくのだらうと考える不安がこれまで以上に母を責めさいなむかどうか、私には判りません。やがて来る苦しみを前もって味わってみようとしたとき、私が最も悲しいことをどんなに想像してみても、そういう激しい不安を感じたことは一度もなかったのです。」<sup>(19)</sup> 母親の死を目前にして、プルーストの現実に対する認識の誠実さは頂点に達しているのであって、永生の可能性を信じようが信じまいが、そこに付きまとう不確実性の元で、彼は、母親の永遠の不在を受け入れようと試みるのである。

### III

『失われた時を求めて』の最終篇『見出された時』の最後の部分に於いて、プルーストは、彼の言わば文学的美学について語り始める。そこでも、死の観念は様々な様相を呈しながら登場する。

Si l'idée de la mort dans ce temps-là m'avait, on l'a vu, assombri l'amour, depuis longtemps déjà le souvenir de l'amour m'aidait à ne pas craindre la mort. Car je comprenais que mourir n'était pas quelque chose de nouveau, mais qu'au contraire depuis mon enfance j'étais déjà mort bien des fois. Pour prendre la période la moins ancienne, n'avais-je pas tenu à Albertine plus qu'à ma vie? ( . . . ) Or c'était maintenant qu'elle m'était depuis peu devenue indifférente, que je recommençais de nouveau à la craindre, sous une autre forme il est vrai, non pas pour moi, mais pour mon livre, ( . . . )<sup>(20)</sup>

プルーストによって「実際に生活された人生」＝物理的時間とプルーストによって「語られた人生」＝小説的時間が溶け合うと同時に、その融合は、これから書かれるであろう一冊の書物の成就によって具現するであろうことが謳われている大団円に於いて、死は、「実際に生活された人生」に於いてそうであったように、特に恋愛に於ける自我の変質に顕著であ

プルーストの「文学的誠実さ」について

ったように、あたかも「継続する死」のように思われることから、「新しいことでも何でも無いばかりか、反対に、少年時代から私はすでに何度となくすでに死んでいることを理解していたからだ」と一旦扱われる。ところが、「死が少し前から私にとってなんでもなくなたまさに今になって、ふたたび私は死を恐れ始めるのであった。それは、いかにも別の形の元で、つまり私という存在のためにではなく私の一冊の書物のためにだった」と述べられているように、言わば作者の不在によって生じる作品の不在への恐れへとその焦点は移ってゆくのである。この時、読者は、今まさに読み終えようとしている眼前にある作品の中に、言わば死の観念の痕跡を再び見出すことで、空間化された時間を内包し得た一冊の書物の成就を確信するに至るのである。

## おわりに

実人生に於いて、死は、常に現前に存在しているはずなのにも拘らず、どちらかと言えば忌み嫌われる対象のひとつであるであろう。

ところがマルセル・プルーストは、幼少の頃から病弱であったという理由があるにせよ、死を、作家生活の中心にあるひとつの大きなテーマとして見据えており、我々が『失われた時を求めて』という結果とし彼の唯一の作品に共感を覚える理由は、恐らくその一点にあるのではないかと思われる。『失われた時を求めて』は、動的なシステムとも呼び得る複雑な構造、まるで詩作品のように純粹に選ばれた語彙や文体、作中人物の多様性、語り手であり主人公でもある一人称体の動き、なににもまして作品自体の長大さなどによって、今も、今からも泉のように、我々に、様々な問を提供し続けるのである。

## 注

- (1) Marcel Proust (1871-1922)
- (2) Pléiade版：A la recherche du temps perdu, tome III, p. 1038
- (3) (2) を参照
- (4) Il faut que l'herbe pousse et que les enfants meurent.
- (5) 訳文については、既刊の訳本を参照した。
- (6) Les Plaisirs et les jours
- (7) 小説作品としては、この二つの作品がある。『楽しみと日々』と『失われた時を求めて』の間には、打ち捨てられてしまった小説の断片や、『失われた時を求めて』の言わば前身である『ジャン・サントゥイユ』 Jean Santeuil, 『サント・ブーヴに反論する』 Contre Sainte-Beuveの存在がある。
- (8) Willie Heath
- (9) Pléiade版：Les Plaisirs et les jours, p.7
- (10) 拙稿：英語英文学論叢「片平」22号 (1987) pp. 47～57

- (11) **Edgar Aubert** : スイス人。1892年 9 月没
- (12) プルーストの父方の祖母が1889年に、また母方の祖母が1890年に亡くなっている。
- (13) プルースト宛のものも含めて今では四千通を超える数である。
- (14) **Saint-Loup**
- (15) **Marcel Proust:A UN AMI, Librairie Plon, Paris 1948 p. 75**
- (16) (15) を参照
- (17) **Marquise de Guermites**
- (18) **Emile Strauss**
- (19) 長文のため訳本に処った。プルースト全集16, 書簡 I, 1989年刊 筑摩書房 p. 463
- (20) tome III, pp.1037~1038